

留学生のための物語日本史

第 14 話 荻生徂徠（おぎゅう そらい）

「この天下泰平の時代に、このようなことが起きるとは全く思わなかった」

幕府からの手紙を見て、いや徂徠はそれより前に、すでに市中の騒ぎやかかわら版¹などですでによく知っていた。

播州赤穂（ばんしゅうあこう）²城主、浅野内匠頭（あさのたくみのかみ）が日頃の対応の悪さと、いわゆるいじめから、恥をかかされたとして、城中松の廊下で吉良上野介（きらこうずけのすけ）に対して刃傷事件（にんじょうじけん）を起こしたということは、幕府の中でも有名な話であった。つまり、城中で刀を抜いたのである。浅野内匠頭は即日切腹、浅野家はお取り潰しとなり家臣たちは浪人となって市中にあふれた。浅野家家老の大石内蔵助（おおいしくらのすけ）は、喧嘩両成敗（けんかりょうせいばい）³の原則に反するとして、幕府に抗議をしたが当然に受け入れられるはずもなかった。

大石の抗議などもあり、幕府では一時、浅野内匠頭の遺臣が幕府に反乱を起こし、城を枕に討ち死にの覚悟⁴で刃向かってくるのではないかというようなことをおそれていた。実際に、大目付（おおめつけ）⁵仙石伯耆守久尚（せんごくほうきのかみひさなお）や、赤穂の城を開場させる収城役⁶の脇坂淡路守安照（わきさかあわじのかみ）や木下肥後守公定（きのしたひごのかみきんさだ）は戦になることを覚悟で赤穂に赴いたのであった。

しかし、心配された反乱や城への立てこもりもなく、大石内蔵助がうまくまとめて赤穂藩はお取り潰しとなった。

「あの時、何かこのままでは済まないとは思っていた」

「先生は、そう言いなすっていたねえ」

徂徠が貧乏で毎日の食べ物にも困っていた時代から付き合いのある豆腐屋は、荻生の家で徂徠の横に座って相槌（あいづち）を打った。この豆腐屋だけは、徂徠に「命の恩人」と言われ、徂徠の家の中であれば、どんな時でもどんな場所でも入ることが許されていた。普段、豆腐を売り終わったら、豆腐屋は徂徠の弟子のために売れ残った豆腐をもってきて、その後このように話し相手になっていたのである。

「しかし、討ち入りとはカッコいいねえ」

「そんなことではないのだよ、豆腐屋。彼らをどうするか。幕府から答えを出せと言われておる」

赤穂藩がお取り潰しとなり、何事もないかとも思った。しかし、大石内蔵助はそのまま終わるような者ではなかった。荻生徂徠は城にたてこもるといきり立った⁷遺臣をまとめ、無事に開城した腕まえを見て、会ったことはないが大石内蔵助という人物が大人物に思えていた。

その大石内蔵助が赤穂の47人の侍を連れ、12月14日吉良邸に討ち入り、見事に吉良上野介を討ち果たした。翌日の朝、吉良邸から亡き主君浅野内匠頭の墓がある泉岳寺（せんがくじ）⁸まで吉良上野介の首を槍の先に結び付けて、武装したまま隊列を組んで参拝したのである。

その行列を見る江戸市民は熱狂に包まれ、一気に赤穂浪士の人気は高まっている。また、武士の間においても大石内蔵助以下、四十七士の忠義を讃える声が大きくなり、その声はそのまま大石内蔵助の助命嘆願として江戸市中に渦巻いていたのである。大石内蔵助が蟄居（ちつきょ）⁹していた肥後熊本藩主細川綱利（ほそかわつなとし）の屋敷の前には、連日助命嘆願と忠義の士、大石内蔵助を一目見ることができないかというような野次馬（やじうま）¹⁰が多く集まり、細川家より早く何とかしてほしいというような訴えが幕府に上がっているのである。

「で、先生。どうするおつもりで」

「いや、切腹だろう」

「そんな、殺生¹¹な」

豆腐屋は、あまりにもつれない荻生徂徠の言葉に落胆の色が隠せない。

「あっしは、生まれてこの方ずうっと豆腐屋でね。豆腐以外のことはほとんど何もわからんが、しかし、今回の赤穂の人々の忠義っていうんですかい、その発想はなかなか良いし、江戸市中の人気も高い。そんな忠義の士をむざむざ殺してしまっっては良くないんじゃござんせんかい」

「いや、豆腐屋。そうではないのだ」

徂徠は深くため息をつくと、ゆっくりお茶をすすり、そして書見台から豆腐屋のほうに向きなおった。

「まずは、法というものがある。法とっては豆腐屋にはわからんかな。法度（はっと）¹²とか掟といったほうがわかりやすいかもしれない。武士には武士の理（ことわり）¹³、法があり、そしてそれに従わなければならない。いかに人気があっても、また討ち入りが正義のためであったとしても、その法を曲げてはならない。そういうものだ」

「そんなものですかい」

「そうだ。仇討ちは素晴らしい。しかし、幕府が一度お取り潰しとして命令を出した。その命令に従わなかったということは、武士として浅野内匠頭に忠義はあったが幕府に対して忠義がなかった。そういうことになる。それをそのままにしては将来、幕府に対して正義のためとして討ち入りをする者が出て、治安が悪くなる。大石はそう望むであろうか」

「赤穂の人々を生かしておくと、江戸が戦になっちまうんですかい」

「まあ、戦になるとまでは言わないが、しかし、幕府の命令に従わなくても良いということになってしまう。それでは困るであろう。特に武士が、幕府に従わなくなってしまうと、いつしかまた戦国の世のようになってしまう」

「なるほどなあ」

豆腐屋は荻生徂徠と同じように腕を組んで、そのまま首を傾けた。その姿は徂徠の真似でもあったが、どこか滑稽（こっけい）¹⁴である。

「それでも惜しいなあ。今、江戸市中では最も人気が高いのは赤穂の人々だ。赤穂の塩なんかはどこ行っても売り切れで。豆腐のにがりもなかなか手に入んねえや」

「豆腐屋。以前豆腐屋自身言っていたではないか。豆腐というのは正直なもので、豆・水・にがり、この三つの材料の言葉を聞き、三つを育てた自然の気持ちに従って作るものだ。豆を変えたり、魚を入れたり。流行りものは一時うまくゆくが、しかし、やはり三つの言葉に従ったものしか生き残らない」

「ああ、豆腐はそうだ。豆腐ってもんは、先生よりも俺様のほうがよく知っているつもりだ」

「その時に、豆腐屋、そなたが誰かから聞いたと言っていた『流行物（はやりもの）は廃り物（すたりもの）』とはよく言ったものだと思ひ、私は感心したものだ」

「そいつはありがたいこつて。先生に褒められるなんざ、今後この先めったにお目にかかれねえですよ」

「今の太石内蔵助もそうだ。今は討ち入りの後で『流行者』であるが、そのうち皆に忘れられ、落ちこぼれ、または身を持ち崩し、そして忠義の士が腐ってしまう。いつしか『廃り者』になってしまう。法を曲げればそのようになってしまうものだ」

徂徠は腕を組みながらそう言った。

「それなら結局、赤穂の人々はみな切腹になっちまうということですかい」

「そうだ。そして命は失っても名前は残す。最も武士としてきれいなところで、武士として命を終わる。そして家を残す。それが武士にとって最も名誉なことではないか」

徂徠は、目にうっすらと涙を浮かべてそう言った。しかし、豆腐屋にはその涙の意味は分からない。

「まあ、先生がそう言うならば、そうなんだろうねえ。でもなんとなく惜しい気がするけどねえ」

「その、惜しい、と思われている間に腹を切らせてあげる。名誉の頂点の時に終わらせてあげる。それも、仇討ちを果たし、すべてやり残すことがない今、その時に終わらせる。多くの江戸市中の人々は、頂点の時の記憶を残す。それが武士の理に最も合った、そして公儀¹⁵の法に最も従った内容ではないか」

後に、このことは将軍徳川綱吉（とくがわつなよし）の御前にて処分裁定論議を行い、林鳳岡（はやしほうこう）をはじめ室鳩巢（むろそうきゅう）・浅見綱斎（あさみけいさい）などが賛美助命論を展開したのに対し、徂徠は義士切腹論を主張した。大石内蔵助が蟄居していた細川家に伝わる「徂徠擬律書」には、

「義は己を潔くするの道にして法は天下の規矩也。礼を以て心を制し義を以て事を制す、今四十六士、其の主の為に讐を報ずるは、是侍たる者の恥を知る也。己を潔くする道にして其の事は義なりと雖も、其の党に限る事なれば畢竟は私の論也。其の所以のものは、元是長矩、殿中を憚らず其の罪に処せられしを、またぞろ吉良氏を以て仇と為し、公儀の免許もなきに騒動を企てる事、法に於いて許さざる所也。今四十六士の罪を決せしめ、侍の礼を以て切腹に処せらるるものならば、上杉家の願も空しからずして、彼等が忠義を軽せざるの道理、尤も公論と云ふべし。若し私論を以て公論を害せば、此れ以後天下の法は立つべからず」¹⁶

と書かれている。

「ところで豆腐屋」

徂徠は、豆腐屋の前に包みを置いた。そこには十両、大金が入っていた。

「なんですかい、これ」

「いや、豆腐屋。聞くところによると豆腐屋の家が火事に巻き込まれて燃えたと聞く。そういえば今日も、豆腐は持ってきていないではないか」

「先生、知ってたんですかい。いや、何とか先生に食べてもらおう豆腐だけはすぐに作るよう

にするから」

「いやいや、以前私が学者で貧乏していた時、そのほうから毎日豆腐を『買って』食べていた。その支払いは出世払い¹⁷にするとおっしゃったままだ。いまだに借財を抱えている。そのうえ、学生に様々持ってきてもらっているではないか。その豆腐代の数々。金利もつけてこれで受け取ってくれるか」

「そりゃ多すぎる」

「多い分は火事の見舞金だ」

「先生、あの赤穂の侍たちを切腹に追い込んだ先生の施しは受けらんねえよ」

豆腐屋は徂徠に金を突き返した。

「豆腐屋殿は貧しくて豆腐をただ食った自分の行為を『出世払い』にして、盗人となることから自分を救ってくれた。法を曲げずに情けをかけてくれたから、今の自分がある。自分も学者として法を曲げずに浪士に最大の情けをかけた、それは豆腐屋殿と同じ。商売人、豆腐屋としての法や理があり、大石内蔵助には浅野内匠頭に対する忠義と、幕府の法を破った武士としての法と理がある。いずれも立場は違えど同じ法と理の中にある。豆腐屋、理解してはくれないか」

徂徠は、そう言うと再び十両を豆腐屋の前に差し出した。豆腐屋は金が欲しいのは間違いがない。しかし、今言った都合上なんとなくためらっている。

「武士たる者が美しく咲いた以上は、見事に散らせるのも情けのうち。武士の大刀は敵の為に、小刀は自らのためにある。大石や赤穂の侍たちは、その道こそ彼らの道とおっしゃるのじゃ。その武士の情け、豆腐屋理解してはくれぬか」

徂徠は重ねて豆腐屋に言った。豆腐屋は少し迷った末にうなずいて、十両を懐（ふところ）¹⁸にしまった。

「いや、ありがたい。豆腐がそんなことになるとは思いませんでした。それに武士の法と理というなんだかわかんないものも教えてもらって。俺は幸せ者だなあ」

荻生徂徠はやっと笑顔を作った。

「しかし、武士の理ってもんはなかなか難しいねえ」

「何でだい」

「いやいや、赤穂のお侍さんたちは忠義のために腹を切ったが、先生はあっしなんざのために自腹を切り¹⁹なすった」

「豆腐屋、うまいなあ」

「うまいのは、あっしの作った豆腐のほうですよ」

荻生徂徠はその後、柳沢吉保（やなぎさわよしやす）に気に入られ、吉保の領国である甲府などを回り、吉保失脚後は日本橋茅場町（かやばちょう）に居を移し、そこで私塾を開いた。徂徠の唱える儒学、武士の道は、「徂徠学派」といわれ、幕末まで武士の精神に大きな影響を与えることになるのである。

¹ かわら版…江戸時代、その時々ニュースをすばやく伝えた情報紙。

² 播州赤穂…現在の兵庫県神戸市周辺。

³ 喧嘩両成敗…けんかや争いをした者を両方とも処罰すること。江戸時代の慣習法。

⁴ 城を枕に討ち死にの覚悟…城主として、落城の責任を果たすために自害または討ち死にすること。逃げたり降伏したりせずに最後まで戦う決意の例え。

⁵ 大目付…江戸時代の幕府の役職の一つ。大名や朝廷を監視する役割を担っていた。

⁶ 収城役…お家取り潰しの後、城の取り上げを実際に行う使者。

⁷ いきり立つ…激しく怒って興奮すること。

⁸ 泉岳寺…東京都港区高輪二丁目にある曹洞宗の寺院。

⁹ 塾居…第13話、脚注13参照。

¹⁰ 野次馬…自分に関係のないことに興味本位で騒ぎ立て見物すること。また、その人々。

¹¹ 殺生…むごいこと、残酷なこと。

¹² 法度…禁じられていること。してはならないことがら。

¹³ 理…物事のすじ道。もったもなこと。

¹⁴ 滑稽…笑いの対象となる、おもしろいこと。

¹⁵ 公儀…公的なこと、幕府または朝廷のこと。

¹⁶ 「義は己を潔くするの～」

義は自分を正しくするための手段であり、法は天下を正しくするための基準である。礼により心を制し、義に基づいて行動を決定する。

今、四十六人の義士が主人のために復讐はするのは、侍として恥を知るものである。それは自分を正しくするやり方であって、それ自体は義である。けれども、それは彼ら一党に限られたことであるから、つまり私的な論理にすぎない。というのは、主人の浅野氏は将軍のいる御殿であるのにもかかわらず刃傷事件を起こし、処罰されたのに、まともや吉良氏を敵としてお上の許しも得ずに騒動を起こしたことは、法において許されないことだからである。

今、四十六人の罪を決定し、侍の礼をもって切腹に処罰されるなら、実父の吉良氏を討たれた上杉家の願

いもかなえられるし、四十六人の忠義を軽視してはいけないという道理も成り立つ。それが公正な議論というべきである。もし私的な論理をもって公の論理を害することになれば、これ以後、天下の法は成り立たなくなるだろう。 ※現代語訳、編集部

¹⁷ 出世払い…成功してから借金を返済すること。また、その約束。

¹⁸ 懐…衣服を着たときの、胸のあたりの内側の部分。

¹⁹ 自腹を切る…必ずしも自分が負担する必要はないが、自分の金で支払うこと。